

## ちくおん通信

発行日： 1990年9月15日

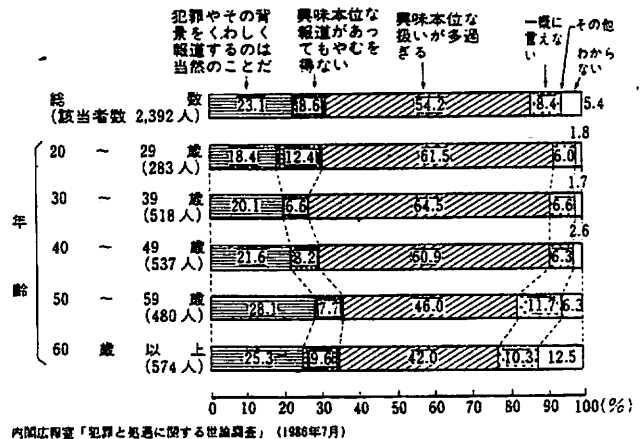
No. 28号

発行者： 盲人情報文化センター録音製作

## グラフの読み方例

この表を読むとき、まず音訳者が悩むのは、総数、年代別にそれぞれ横に読んでいくか、それとも項目別に縦に読んでいくかでしょう。この場合、音訳者は、縦に読むことにしたようですが、図・表を読む場合、本文との関係なども考慮しながら、どちらに読んだ方が分かりやすいかを検討したうえで読むようにしましょう。この場合、縦に読んだ方が分かりやすいように思います。

図表2-3 マスコミの犯罪報道をどう思うか



72

## &lt;Nさんの例&gt;

72ページ、図表2-3、マスコミの犯罪報道をどう思うか。内閣広報室「犯罪と処遇に関する世論調査」1986年7月、説明、犯罪報道の思い方6通りを%で表わした帯グラフです。帯グラフは総数と20代から60代以上までの5世代に分かれています。総数(該当者2,392人)、20~29才283人、30~39才518人、40~49才537人、50~59才480人、60才以上574人。1、犯罪やその背景を詳しく報道するのは当然のことだ。総数、23.1%、20代18.4%、30代20.1%、40代21.6%、50代28.1%、60代以上25.3%。2、興味本位な報道があってもやむを得ない。総数8.6%、20代12.4%、30代6.6%、40代8.2%、50代7.7%、60代以上9.6%。3、興味本位な扱いが多過ぎる。総数54.2%、20代61.5%、30代64.5%、40代60.9%、50代46%、60代以上42.0%。4、一概に言えない。総数8.4%、20代6.0%、30代6.6%、40代6.3%、50代11.7%、60代以上10.3%。5、わからない。総数5.4%、20代1.8%、30代1.7%、40代2.6%、50代6.3%、60代以上12.5%。6、その他。その他はすべて1%未満で数字の記入なし。(図表)説明終わり。

正誤表から……その5

語句	誤読	正しい読み	語句	誤読	正しい読み
稀有	キウ	ケウ	悔り	アザケリ	アナドリ
極致	ゴクチ	キョクチ	解脱	カイダツ	ゲダツ
念力	ネンリョク	ネンリキ	凝集	ギシュウ	ギョウシュウ
堅固	ケンコ	ケンゴ	凡例	ボンレイ	ハンレイ
善処	ゼンキョ	ゼンシヨ	疾病	シツビョウ	シツペイ
慘酷	ザンコク	サンコク	借款	シャキン	シャツカン
完治	カンジ	カンチ	辛辣	シツラツ	シンラツ

—衣帯水 イチ・イタイスイ? イチイタイスイ?

上記の熟語の読みが、校正で二、三度問題になりました。

音訳者はこれをイチ・イタイスイと読まれ、校正者からイチイタイスイと読むべきと指摘されました。普通これはイチイタイスイと読まれる方が多いようですが、日本実業出版社の『四字熟語辞典』にはイチ・イタイスイが正しく、イチイタイスイと読むのは間違いと指摘しています。昭和41年版のNHKのアクセント辞典には、イチイタイスイとイチイ・タイスイと出ていますが、最新版にはイチ・イタイスイしか出ていません。

これとよく似た間違いで、「間髪を入れず」という言葉があります。正しくはカン・ハツヨイレズですが、よくカンハツヨイレズと読まれる方があります。校正で間違いを指摘するときは、必ず辞典で確認するようにしましょう。

調査について

[現代人の調べ方]

人名を調べる場合、その人が本を書いている、「日本書籍総目録」「著作権台帳」などを調べます。「日本書籍総目録」は年度別に出ていますので、何冊か調べる必要があります。著者でない場合、人物レファレンス辞典、現代日本人名録、人事興信録などを調べます。(これらの辞書は7階にあります。)

[会社名の調べ方]

日本経済新聞社から出ている『日経 会社情報』や東洋経済新報社から出ている『会社四季報』を調べれば、上場会社や未上場会社などがルビ付で出ています。ちなみに日本経済新聞社は『会社四季報未上場会社版』(東洋経済新報社)にニホンケイザイシンブンシャと出ています。

◇◇◇ 家庭録音 Q&A ◇◇◇

Q 家庭録音用のテープレコーダーを買い換えたいと思っていますが、よい機種がありましたら教えてください。

A 録音機はいろいろ出ていますので、どんなものが向いているのか自分で見つけるのは大変です。カセットテープレコーダーには、ダブルカセットやラジオが付いているものなど多機能のものが出回っていますが、録音図書作りには必要のないものです。音質、操作性などを考えれば、カセットデッキが一番向いていると思います。カセットデッキにもいろいろありますが、現在、売り出されているものでは、ソニーのTC-RX70が適切かと思われます。2ヘッドで、訂正なども比較的簡単で音質も良いようです。4トラックで録音しますので、マイクのコードは2本に分かれた分岐コードが必要になります。また、カセットデッキは再生装置がありませんので、スピーカーが必要になりますが、ヘッドホンでもかまいません。費用は、カセットデッキ代が、定価39,800円ですが、日本橋で32,000円前後で購入できるようです。分岐コードは千円程度です。

Q カセットデッキで訂正した時にどうしても最後にブチッという音が入るのですがこれを取る方法はないのでしょうか？

A 訂正などの時に、頭の部分には雑音は入らず、終わりにどうしてもブチッと雑音が入るケースが多いようです。この雑音を取るには、雑音の手前でテープを止め、録音ボリュームをゼロに絞って、雑音部分を無録音で消してしまいます。雑音部分だけを消しますので、ほんのちょっと録音してストップします。そのコツを覚えれば簡単に消すことができます。

リクエスト図書 (音訳者未決定図書)

下記の図書は利用者から依頼されている図書ですが、現在読み手が決まっていない図書です。音訳してもよいと思われる方がありましたら、清水までご連絡ください。

『折伏教典』創価学会教学部編 (P364)

『受験ポイントマスター基礎科目編』医道の日本社編 (P270)

『慶弔詩歌集』日本詩吟学院岳風会編 (P87)

『愛吟集』日本詩吟学院岳風会編 (P148)

『あん摩・マッサージ・指圧・鍼・灸 受験ポイントマスター 専門科目編』医道の日本社編 (P249)

『朗詠集』日本詩吟学院岳風会編 (P140)

『仙人不老不死学』高藤聡一郎著 (P250)

『昆虫の行動』高橋正三著 (P176)

『あん摩・マッサージ・指圧・鍼・灸・柔道整復

————— **報からのお知らせ** —————

**家庭録音のチーム化について**

現在、利用者から依頼された図書館の音訳は、いくつかのグループとICCBの家庭録音ボランティアとで行われています。昨年末より、スタジオ関係の音訳ボランティア、編集ボランティアのチームがスタートし、今年は、校正ボランティア、作業ボランティアのチーム化が行われています。それぞれのチームには世話役2名を選出し、世話役の協力のもとにそれぞれの作業を進めています。チーム化の遅れていましたICCBの家庭録音ボランティアもこの秋までにはチーム化を進めていく予定です。このチームは、個人でICCBの家庭録音ボランティアとして登録されている方、および、グループ84、ロバータのメンバーで家庭録音をされている方が対象です。チームの世話役が決まりましたらお知らせします。

また、チーム化が決まりましたら、リクエスト図書製作関係のグループやチームのリーダーに集まってもらって定期的な会議も進めていく予定です。

**『ろくおん通信』希望グループに無料が必要部数を送ります。**

音訳ボランティアのための情報紙として、『ろくおん通信』を発行しています。『ろくおん通信』を希望されるグループがありましたら、盲人情報文化センターの清水までご連絡ください。必要部数を無料で郵送します。日常の音訳活動に役立てていただければと思います。

**編集後記** がまんの夏もようやく過ぎ、読書の秋を迎えました。

音訳、編集、校正とそれぞれの部門のチーム化が進み、新体制もようやく整ってきましたが、それに伴って問題点も出て来ているようです。ボランティア一人一人が気持ちよく仕事に取り組めることが何より大切です。その上で、本を待っていて下さる利用者のことを考え、一冊でも多くのよい本を提供できればと、これが私たち皆の願いだと思います。疑問に思うこと、不満に思うことは一人の胸にしまっておかないで皆で考え、出来ることから変えて行きたいと思うのですがいかがでしょうか？ (久保)

1. 受身形

① 助動詞「見・被・為・遇・遭・所」などの語を用いるもの。「る・らる」と訓読して、「〜られる」と訳す。

匹夫見<sup>レ</sup>釋<sup>ル</sup> 拔<sup>キ</sup>劍<sup>ヲ</sup>而起<sup>ス</sup>  
端然正<sup>レ</sup>己<sup>キ</sup> 不<sup>レ</sup>為<sup>ル</sup>物<sup>ニ</sup>傾倒<sup>ス</sup>

② 助動詞「為——所——」を用いるもの。「為——所——」と読み「——から……される」と訳す。また別に「為——所——」と読むこともあるが意味は同じである。

先<sup>ニ</sup>取<sup>テ</sup>制<sup>ス</sup>人<sup>ヲ</sup> 後<sup>ニ</sup>取<sup>テ</sup>為<sup>ル</sup>人<sup>ノ</sup>所<sup>ト</sup>制<sup>ス</sup>  
先<sup>ニ</sup>取<sup>テ</sup>制<sup>ス</sup>人<sup>ヲ</sup> 後<sup>ニ</sup>取<sup>テ</sup>為<sup>ル</sup>人<sup>ノ</sup>所<sup>ト</sup>制<sup>ス</sup>

③ 前置詞「於・于・乎」などを用いるもの。

勞<sup>ル</sup>心<sup>ヲ</sup>者<sup>ハ</sup> 治<sup>ス</sup>人<sup>ヲ</sup> 勞<sup>ル</sup>力<sup>ヲ</sup>者<sup>ハ</sup> 治<sup>ス</sup>於<sup>テ</sup>人<sup>ニ</sup>

④ 「叙・任・補・拜」など、位階官職を受けることを表す字を用いてある場合は受身に読む。

任<sup>ズ</sup>鎮守府將軍<sup>ニ</sup> 叙<sup>ス</sup>正四位<sup>ニ</sup>

⑤ 前後の関係・文意から判断して受身に読むもの。

遵<sup>フ</sup>詔<sup>ヲ</sup> 秦王<sup>ニ</sup> 不<sup>レ</sup>用<sup>フ</sup>

2. 使役形

① 「使・令・教・遣・俾」などを用いて「——ヲシテ……シム」とよみ「——に……させる」と訳す。

師使<sup>シ</sup>弟子<sup>ヲ</sup> 誦<sup>ス</sup>書<sup>ヲ</sup> 不<sup>レ</sup>教<sup>ス</sup>胡馬<sup>ヲ</sup> 度<sup>ス</sup>陰山<sup>ヲ</sup>

② 「召・遣・教・命・詔・赴・戒・厲・勸・率」などの動詞が上にあるときは、下の述語には

「シム」を送って使役の意に読む。  
厲<sup>シ</sup>予<sup>ヲ</sup> 作<sup>シ</sup>文<sup>ヲ</sup> 以<sup>テ</sup>記<sup>ス</sup>之<sup>ヲ</sup>

③ 使役の意を示す語がなくても、文意の上から考えて「シム」と送ってよむもの。

下<sup>ヲ</sup>馬<sup>ヲ</sup> 飲<sup>ス</sup>君<sup>ノ</sup>酒<sup>ヲ</sup> 遣<sup>シ</sup>六國<sup>ヲ</sup> 以<sup>テ</sup>車<sup>ヲ</sup> 塞<sup>ス</sup>

3. 否定形

① 「不・弗(ズ)」「非・匪(アラズ)」「未(イマダ)ズ)」「無・莫・固・靡・勿・毋(ナシ・ナカレ)」などを使って打ち消すもの。

小善<sup>ハ</sup> 弗<sup>レ</sup>能<sup>ク</sup> 消<sup>ス</sup> 大惡<sup>ヲ</sup> 不<sup>レ</sup>幸<sup>ニ</sup> 莫<sup>ク</sup> 大<sup>ニ</sup> 於<sup>テ</sup> 此<sup>ニ</sup>

② 否定の語を重ねて用い、強い肯定を表す。(二重否定)

イ「無<sup>ク</sup>不<sup>レ</sup>」・「無<sup>ク</sup>非<sup>ズ</sup>」・「非<sup>ズ</sup>不<sup>レ</sup>」・「非<sup>ズ</sup>無<sup>ク</sup>」(「〜ないものはない」)

ロ「不可<sup>ク</sup>不<sup>レ</sup>」・「不得<sup>ク</sup>不<sup>レ</sup>」(「〜しなければならない」)

ハ「未<sup>ダ</sup>不<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>」(「これまで〜しなかったことはない」)

ニ「無<sup>ク</sup>不<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>」・「無<sup>ク</sup>不<sup>レ</sup>無<sup>ク</sup>」(「〜どんなくでも……ないものはない」)

ホ「不<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>」(「〜しないことはない。〜せずにはいられない」)

ヘ「無<sup>ク</sup>不<sup>レ</sup>無<sup>ク</sup>不<sup>レ</sup>」(「〜も〜もともにみな」)

③ 否定の語に他の副詞がついた場合

イ、全部否定と一部否定。副詞が否定詞の上にある場合は全部否定。下にある場合は一部否定となり、送り仮名で区別する。

必<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>高<sup>レ</sup>潔<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>士<sup>ナリ</sup>  
不<sup>レ</sup>必<sup>ニ</sup>高<sup>レ</sup>潔<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>士<sup>ナリ</sup>

家<sup>ニ</sup>貧<sup>ニ</sup>而<sup>モ</sup>常<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>得<sup>ル</sup>油<sup>ナリ</sup>  
家<sup>ニ</sup>貧<sup>ニ</sup>而<sup>モ</sup>不<sup>レ</sup>常<sup>ニ</sup>得<sup>ル</sup>油<sup>ナリ</sup>

ロ、副詞の位置によって反語形や詠嘆形になる。

「敢<sup>テ</sup>不<sup>レ</sup>作<sup>ル</sup>」(反語で肯定となる) 百<sup>ノ</sup>獸<sup>ノ</sup>之<sup>レ</sup>見<sup>テ</sup>我<sup>ヲ</sup>而<sup>モ</sup>敢<sup>テ</sup>不<sup>レ</sup>走<sup>ル</sup>乎

「不<sup>レ</sup>敢<sup>テ</sup>」(強意の打消しとなる) 百<sup>ノ</sup>獸<sup>ノ</sup>之<sup>レ</sup>見<sup>テ</sup>我<sup>ヲ</sup>而<sup>モ</sup>不<sup>レ</sup>敢<sup>テ</sup>走<sup>ル</sup>也

「亦<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>」(「またしず」と読み「くもまたくない」の意)

「不<sup>レ</sup>亦<sup>レ</sup>」(「またしずや」と読み「なんとくではないか」の意)

春<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>樂<sup>ム</sup>冬<sup>ニ</sup>亦<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>樂<sup>ム</sup>

夏<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>亦<sup>レ</sup>樂<sup>ム</sup>乎

ハ、限定する語「唯・惟・但・徒・特・暫・独」などのある句を否定する場合は「ただ(ひとり)ノミナラス(ノミアラス)」と読み「ただ単に(だけではない)」の意味となる。

非<sup>ニ</sup>徒<sup>ニ</sup>無<sup>ク</sup>益<sup>ナリ</sup>

非<sup>ニ</sup>独<sup>ニ</sup>賢<sup>ク</sup>者<sup>ハ</sup>有<sup>ル</sup>是<sup>ノ</sup>心<sup>ナリ</sup>

★ 限定語を反語的に否定する形がある。

「何<sup>ノ</sup>独<sup>リ</sup>何<sup>ノ</sup>豈<sup>ニ</sup>徒<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>乎<sup>ナリ</sup>」なんぞひとりーのみならんや・あにただにーのみならんや (「どうして(だけ)であろうか。(だけではない)」)

故<sup>ニ</sup>郷<sup>ニ</sup>何<sup>ノ</sup>独<sup>リ</sup>在<sup>リ</sup>長<sup>ク</sup>安<sup>ナリ</sup>

4. 仮定形

① 副詞の「若・如・設・苟・仮・儻」などを用いるもの。「もしくバ・もしくトモ」と読み「もしとすれば・もしくとしても」の意。

若<sup>シ</sup>以<sup>テ</sup>与<sup>ハ</sup>我<sup>ニ</sup>皆<sup>ク</sup>喪<sup>ハ</sup>宝<sup>ナリ</sup>也

設<sup>シ</sup>読<sup>ム</sup>書<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>能<sup>ク</sup>解<sup>ス</sup>也

② 「苟」を用いるもの。「いやしくモくバ」と読み「かりそめにもくしたら」の意。

苟<sup>モ</sup>不<sup>レ</sup>充<sup>ク</sup>之<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>足<sup>ク</sup>以<sup>テ</sup>事<sup>ハ</sup>父<sup>母<sup>ニ</sup></sup>

③ 使役形の「使」を用いるもの。

④ 「寧」を用いて比較の仮設を表すもの。「むしろトモ」と読み「いっそくとしても」の意。

⑤ 「微」を用いるもの。「なかりせば」と読み、推定の送り仮名をつけて、仮設的否定形を表す。

微<sup>ニ</sup>斯<sup>ノ</sup>人<sup>ニ</sup>吾<sup>ニ</sup>誰<sup>ニ</sup>与<sup>ハ</sup>帰<sup>ス</sup>

⑥ 「縱令・縱・仮令・仮・借令・假使・仮設・設令・設使・就・藉」などを用いるもの。

「たとくトモ」と読み「そんなことはないはずだが、よしあったにしても」の意。

縱<sup>モ</sup>彼<sup>ノ</sup>不<sup>レ</sup>言<sup>ハ</sup>籍<sup>ニ</sup>独<sup>リ</sup>不<sup>レ</sup>愧<sup>ハ</sup>於<sup>テ</sup>心<sup>ニ</sup>乎

⑦ 「雖(いへども)」を用いるもの。

イ、仮定の場合。「たといてあるにしても」の意。

自反乎而縮雖千萬人吾往矣。

ロ、既定の場合。「くであるけれども」の意。

江東雖小地方千里。

⑧ 「不……不……」のように否定句を二つ重ねて、上句を仮定に読むもの。

不入虎穴不得虎子。

⑨ 「否則」を用いるもの。「しからざればすなはず」と読み、上句をうけて「そうでなければ」の意。

否則讀書。

⑩ 前後の文章から判断して仮定の意に読むもの。

君子交絶不出惡声。

5. 限定形

① 終尾詞の「耳・爾・已・而已・已矣・而已矣」などを用い、「のみ」と読んで「くだけ・ばかり」の意。

② 副詞の「唯・惟・但・只・徒・直・特・善・第・止」などを用い、「ただ・ただ」と読み「くのほかになく・こればかり」の意。

多くは終尾詞の「耳・而已」と呼応して「ただのみ」と読む。

③ 「自非」を用いるもの。「あらずよりハ」と読み「くでない限りは」の意。

6. 比較形

① 単なる比較

イ、「於・于乎」を用いる。

ロ、「不如」(くしからず)「無若」(くしからず)を用いる。

ハ、「真」(これヨリくナルハなし)

② 一方を選択する場合。

イ、「寧……不(無)……」(むしろトモ……ぞし(なカレ)を用いて前者を選ぶもの。

ロ、「与……寧……」(ナランよりハむしろ……セヨ)・「与……不如……」(くセンよりハ……しからず)を用いて後者を選ぶもの。

ハ、「与……孰者……」(ナランよりハ……こいづレゾ)・「……孰若……」(くは……こいづレゾ)を用いて後者を選ぶ。

7. 反語形

① 疑問詞の場合

イ、「何・曷・庸・烏・胡」(なんゾクセン(ヤ))

ロ、「焉・安・惡・寧・烏」(いづくんゾクセン(ヤ))

ハ、「誰・孰」(たれカクセン(ヤ))

② 「哉・乎・也・邪・耶・歟・与」(や・か)とよむ。

③ その他の特別な反語

イ、「敢不……」

ロ、「不亦……乎」

ハ、「不其……乎」

ニ、「其……」

① 疑問詞

- イ、「誰・孰」(たれカ)と読んで人をたずねる。
- ロ、「孰」(いずレカ)と読んで「どちらがーか」の意。
- ハ、「何・曷・胡」(なんソクヤ(カ)と読んで「どうしてーか」の意。
- ニ、「安・惡・焉」(いつクニカ)と読んで「どこにーか」の意。
- ホ、「如何・何如・何若・奈何・若如」(いかん・いかんソ・いかんセン)「どのような・  
どうするか」の意。  
一般に「如何」は「どうするか・どうして」と方法や理由をたずねる時につかう。
- ヘ、「幾何・何」(いくばくソ)「どれほど・どれだけ」の意。

② 疑問終尾詞を用いる場合「哉・乎・也・邪・耶・歟・与」(や・か)と読んで、疑問の語気を助ける。

③ 疑問詞と疑問終尾詞を併用する時。

果<sup>キ</sup>安<sup>ニ</sup>在<sup>リ</sup>哉。

④ 熟合の疑問詞「何時・何以・何由・何為」

9. 命令・禁止形

命令・禁止の意を表す特定の語はない。それぞれ前後の文章から判断する。

10. 感嘆形

形の上では疑問形・反語形と同じものがあるので文意から判断して読む。

- ① 感動詞の「嗚乎・嗟乎・於・吁・噫」など(ああ)と読んで感嘆・詠嘆の意とする。これらは一般に句頭に置かれる。
- ② 疑問終尾詞の「哉・夫・矣・也・乎」(や・か・かな)と読んで感動を表す。
- ③ 感動詞と疑問終尾詞との併用。 嗚乎、哀哉。

11. 願望形

- ① 「願<sup>ハ</sup>」(カ)、「願<sup>ニ</sup>」(カ)「願<sup>ハ</sup>」(カ)、「願<sup>ニ</sup>」(カ)「願<sup>ハ</sup>」(カ)、「願<sup>ニ</sup>」(カ)
- ② 「庶幾<sup>ハ</sup>」(カ)「(こひねがハクハクセン)「どうかうしたい」。
- ③ 「願<sup>ハ</sup>」(カ)、「願<sup>ニ</sup>」(カ)「願<sup>ハ</sup>」(カ)、「願<sup>ニ</sup>」(カ)
- ④ 「欲<sup>ハ</sup>」(カ)、「欲<sup>ニ</sup>」(カ)「欲<sup>ハ</sup>」(カ)、「欲<sup>ニ</sup>」(カ)
- ⑤ 「安得<sup>ハ</sup>」(カ)「(いつくんソクマエン)「どうかうしたいものだ」

12. 推量形

- ① 「蓋<sup>ハ</sup>」(カ)「思うに〜であろう」の意。
- ② 「以為<sup>ハ</sup>」(カ)「思うに〜と思われる」
- ③ 「或・恐・疑・大率」
- ④ 「庶幾<sup>ハ</sup>」(カ)、「庶<sup>ハ</sup>」(カ)「(〜ちかシ)「願ったらくできよう・恐らく〜できよう」
- ⑤ 再読文字の「庶<sup>ハ</sup>」を用いて(まさニ〜ベシ)「まこと〜だろう」の意。